

## 頭の位置と筋トーン

### 臨床学的観察

#### Head Position and Muscletone

#### —Clinical Observations—

A. Simons

(Atschr. f. d. ges. Neurol. u. Psychiat, 80,  
499-549, 1923)

第一次大戦中、戦傷による頭部傷害者を対象として、頭の位置がいかに協同運動に影響するかが、Dr. Simons によってはじめて調べられた。のちに彼は、他の原因による Neurological Conditions の患者をも集めて調べた。すなわち、trauma, tumor, CVA による片麻痺のおとなの患者と CP の子どもの患者、計 248 人を集めて調査をしてデータを集めた。その方法は Standardized testing procedure によって各患者を数回にわたって調べられた。そして患者の Motor behavior は、背臥位・坐位・立位・歩行の姿勢で観察が行なわれた。

協同運動を引き出す方法は、健側の手で“にぎりこぶし”をつくらせたり、健側への抵抗、それで出ない時は、患側の脚を動かすように命ずると、上肢に現われた。同時に、協同運動中の上腕二頭筋・三頭筋が、筋電図によって調べられた。同じ患者でも、ある日には agonist にきれいに action current が現われ、antagonist が inhibition されていたのが、別の日には、この 2 つの筋に co-contraction が現われたりした。

latency periods of the reaction (反応潜伏時) は患者によって異なる。健側が収縮するやいなや、患側に協同運動が現われて、latency periods は非常に短い時もあるが、同一患者でも他の時には何秒かおくれる場合もあって、一定ではない。

協同運動は必ずしも joint movement を伴わない。単に筋トーンの変化が現われる場合だけの時もある。その時は、他動運動に対する抵抗の度合いによって、筋トーンが高くなったか低くなったかを決めた。

結果として、次のことが観察された。健側への頭の回旋は肘屈曲肩関節外転、前腕の回外の筋のトーンの高まりがみられた。その時、ある患者は wrist の伸筋に、他の患者は屈筋に筋トーンの高まりがみられた。下肢においては、股屈筋・膝屈筋・足関節の背筋・内反のトーンの高まりがみられた。

次に患側への頭の回旋においては、肘伸筋、肩関節内

転筋、内旋筋、wrist の背屈筋（これは健側に回旋した時の wrist の背屈より強く現われた）の各筋トーンの高まりがみられた。下肢においては、股・膝の伸筋、またときには股関節の内転・内旋筋、足関節においては時には背屈・底屈とそれぞれ現われて、筋トーンの高まりがみられた。内反は常に現われた。上記に現われたタイプは屈屈外転パターン、伸展内展パターンにそれぞれ相当する。頭の前屈位では伸展内転筋の筋トーンの高まりがより多く現われ、背屈位では屈屈外転筋の筋トーンの高まりがより多く現われた。

## アテトーゼと自己毀傷を伴う

### 高尿酸血症と精神薄弱

#### Hyperuricemia and mental Retardation with Athetosis and Self-mutilation

William M. Michener, M. D., Cleveland

(American J. Dis. Child, vol. 113, Feb., 1967)

精薄と両側性のディストニー様運動と口唇や指をかむ自己毀傷を伴った高尿酸血症は、最近新たに認識された症候群であり、Lesch と Nyhan の調査によれば、尿中の尿酸排泄の増加、尿酸の蓄積 (pool) の増加が関係していることが啓示されたが、その病態生理学はまだ明らかではない。ここでは、この症候群をもった 6 人の少年たちにおけるケース記録により、なお詳細にこの症候群について述べている。

すべての報告例が男子であり、出産前、出産時、新生児期には異常なく、乳児は何か月かは正常に发育している。それから両親は子供の被刺激性 (irritability) と发育遅延に気づき、“脳性麻痺ではないか”と医師に相談し、そのころから四肢の痙性と上肢のアテトーゼ運動が観察され、それがますます強くなり、2, 3 歳になると、口唇かみ、指かみ、歯ぎしりなどみられる。これは本症の最も特異な症状である。性格も独特で、敏活 (alert) 喜びやすく (eager to please), IQ はテストより高くみえる。代謝異常であることは確かであり、遺伝型式は明らかではないが、伴性劣性遺伝であるとの説が最も有力である。両親の血清中尿酸値の増加がみられる。

治療として、尿酸尿症の薬の probenecid が与えられ、血清尿酸値は低下するか正常値にとどまった。血清尿酸値の減少は、被刺激性を減少させ、アテトーゼ運動を減少させる。ケースでは乳児期の早期に診断が確立されたが、早期治療により、症候群の経過をよりよく修正すると思われるので、敏速な診断の確立が望まれる。